

妻の寝取られ報告～鬱勃起が止まらない僕の異常性癖～

第一章：不調の始まり——崩壊への第一歩

俺はまたしても萎えてしまった。

布団の中、美桜の体温がすぐそばにある。エアコンの設定温度は二十六度に保たれているはずなのに、二人の肌が触れ合う部分だけが、妙に熱を持って感じられた。その熱は、快感の予兆ではなく、むしろ何かに追い詰められているような焦燥の熱だった。

彼女は仰向けに寝て、薄暗い寝室の天井をじっと見上げている。窓から差し込む街灯の光がレースのカーテン越しに柔らかく歪み、彼女の白い喉のラインを浮かび上がらせていた。三十歳になった美桜の喉は、少女のような細さと成熟した女の艶やかさを同時に湛えている。呼吸のたびにその喉が微かに上下し、鎖骨のくぼみに影を落とす。

俺は、彼女のその横顔を盗み見るようにして観察していた。目尻に少し垂れ気味の睫毛。鼻筋の通った整った顔立ち。薄く開いた唇。すべてが俺にとって愛おしく、同時に恐ろしいものを感じられた。愛おしいのは、それが自分の妻であるから。恐ろしいのは、それが——もう自分の手には届かないもののように思えるからだ。

結婚して三年、三十歳になった美桜の体は、女として熟れきっていた。二十代の頃の少しほっそりとした少女性は既に抜けきり、代わりに女としての深い柔らかさが宿っていた。胸の形は二十代の頃よりも柔らかな重みを増し、仰向けになるとその乳房は自然に横に流れて広がる。腰の線は子供を産んでいないだけに、まだ締まりを保っている。鎖骨の下から胸元にかけての柔らかな起伏。パジャマの薄い生地越しに、乳首の輪郭がうっすらと透けて見える。

俺はその体を、三年間毎日のように見てきた。指で辿り、唇で確かめ、自分の体で覆ってきた。はずなのに、今夜もまた同じ轍を踏んだ。いや、踏まされている、と言うべきか。何か大きな、目に見えない力が俺と美桜の間に割り込んで、俺のモノから力を奪っているような気がした。

「……入れるね」

俺は自分のモノを握り、彼女の割れ目にあてがった。パジャマのズボンをずり下ろし、下着から半勃ちのモノを取り出す。先端が、既に濡れ始めた部分に触れる。美桜の

体は健康な三十歳の女の体だ。触れられれば、ちゃんと反応する。愛液が恥ずかしいくらいに滲み出て、俺の亀頭を濡らす。

美桜は少し身動ぎして両足を自然に開き、俺を迎え入れる準備をする。太ももの内側がひやりと露わになる。シーツがかすかな摩擦音を立てた。その音が、俺の耳に異常に大きく響いた。緊張のせいだ。いつもなら気づかないような小さな音が、今夜は鼓膜を震わせる。時計の秒針の音、遠くの車のエンジン音、隣室の空調の唸り——すべてが俺の集中を削いでいく。

ダメだった。

先走りを垂らしながら先端を押し付けようとした瞬間、それまで半分だけ硬かったモノが、まるで嘘のように力を失う。血管に血液が満ちていた張りが、一瞬で抜けていく。皮が被ったまま、ただの柔らかい肉の塊になってしまう。冷たい空気が先端に触れる。俺は、自分のモノがどんどん小さくなっていくのを、目で確認しながら感じていた。まるで自分の男としての価値が、その柔らかい肉と一緒にしなびて、萎んでいくような気がした。

「……ごめん」

暗い寝室の中、俺は美桜に謝るしかなかった。声は自分でもわかるほど震えていた。低く、掠れた、情けない声だった。三十二歳の男が、愛する妻に自分のモノを立たせられないことを謝る。その屈辱は、心の深いところをじわじわと蝕んでいく。

美桜は、一瞬だけ目を閉じた。長い睫毛が頬に影を落とす。その表情を、俺は見逃さなかった。優しく微笑む前に、一瞬だけ深い深い寂しさが顔を覗いたのを。それは最近、頻繁に見る表情になっていた。最初は気のせいかと思っていた。しかし外れなく繰り返されるうちに、それが間違いのないことに気づいた。そして、その表情が俺の心に鈍い痛みを与えることをも知っていた。

「気にしないで。疲れてるんでしょ」

その声はいつもの通り、穏やかで優しかった。優しすぎる、と感じるほどに。まるで病人に接する看護師の声だった。実際、美桜は元看護師だったのだから、その口調は職業的なものかもしれない。だが、俺は妻の夫であって、彼女の患者ではないはずだ。それなのに、いつの間にか二人の関係は微妙に変質し始めていた。

でも、俺は知っていた。彼女の目に、一瞬だけ、本当に一瞬だけ、深い深い寂しさが滲んだのを。美桜は俺のEDに対して、最初は「気にしないで」と言っていた。でも最近、その言葉の裏に焦燥を隠していることがわかる。

三十歳を過ぎた女の焦燥。周りの友人が次々と子供を産んでいく中での焦燥。生物としてのタイムリミットを肌で感じている女の、切実な焦り。

結婚して三年。翔太は三十二歳、美桜は三十歳。俺は中堅IT企業の営業部で平凡に働いている。毎朝八時に出社し、時には残業で夜九時や十時に帰宅する。そんな平凡なサラリーマンだ。給料も平均的、容姿も平均的、性格も特筆すべきものはない。ただ、美桜と出会えたことだけが俺の人生の最大の幸運だった。

大学時代、美桜は他学部の後輩で、共通の友人を介して知り合った。当時から美桜はそのクラス、いやその学年でも群を抜いて美しく、多くの男に言い寄られていた。それが、なぜか俺を選んでくれた。その奇跡を、俺は今も理解しきれていない。だからこそ、彼女を失うことが何よりも怖かった。

美桜は元看護師で、結婚を機に専業主婦になった。もともと子供が好きで看護師を選んだという経緯がある。だからこそ、妊活に対しての焦燥は俺以上に大きいはずだ。彼女の子供好きは、街で子連れの母親を見かけると、その顔が微かに緩むことから見て取れた。ベビー用品店の前を通ると必ず立ち止まる。あの、まだ見ぬ我が子を、彼女は既に心の中で抱きしめているのだ。

妊活を始めて一年。最初は「焦らなくていい」「子供はタイミングだから」と言っていた美桜も、最近は焦りを隠せなくなっている。基礎体温を毎朝几帳面につけ、排卵日をカレンダーに書き込み、その日は必ず俺を早く帰らせようとする。だが、そういう日ほど俺のプレッシャーは大きくなり、そういう日ほど俺のモノは立たなかった。皮肉な話だ。子作りのために勃たなくてはならない日ほど、勃たない。

周りの同年代の友人が次々と妊娠していく中で、彼女の焦燥は増していった。SNSを開けば、友人の妊娠報告、出産報告、赤ちゃんの写真。それを、美桜は目を細めて眺めながら「いいね」を押す。そしてスマホを閉じたあと、しばらく無言でぼんやりとする。俺は、その横顔を見てはいけないもののように、そっと視線を逸らすしかなかった。

先月、親友の恵里が出産したとき、美桜は病院の待合室で笑顔でいながら、トイレで泣いていたことを翔太は知っていた。帰宅した彼女の目が赤く腫れていたからだ。それでも「花粉症だから」と言い訳していた。俺は何も言えなかった。自分の不調が原因だからだ。もし俺のモノがちゃんと立てば。もし俺の精子がちゃんと美桜の卵子と出会えば。すべてはうまくいくはずだった。

そして、そのプレッシャーが俺を蝕んでいた。

ED。勃起不全。三十代前半の男にとって、あまりにも早すぎる不調。病院にも行ったが、「心因性ですね」「焦らないでください」「パートナーとのコミュニケーションが大切です」と言われるだけ。血液検査もホルモン検査もすべて異常なし。「体は健康ですよ」と言われるほど、心が病んでいく。体が悪ければまだ諦めがつく。だが、体は正常なのに勃たないというのは、つまり——自分の心が妻を求めている、あるいは何かに怯えている、ということになる。

バイアグラも試したが、美桜を前にすると薬効が半減するように感じた。緊張してしまうのだ。俺は美桜を愛している。だからこそ、緊張する。そして緊張が萎えを呼び、萎えがさらなる緊張を呼ぶ。悪循環だった。医者「自信を持って」と言う。でも、自信を持てる要素がどこにあるというのか。

会社では上には認められず、下からは軽んじられる。中間管理職の入り口で、俺は既に息切れしている。同期の中で営業成績は真ん中より下。同期の田中は既に主任に昇進した。俺はそのまま平社員。上司の黒川部長は、俺を評価しているような、していないような、微妙な態度を取り続ける。時々褒められることもあるが、それは犬に餌を与えるような、上からの目線での褒め方だった。

そんな男の自信が、勃起の源になどなり得るはずがなかった。

「もう寝よう。おやすみ」

美桜が俺の頬にキスして、背中を向ける。唇の感触はいつもより少し冷たかった。まるでロビーで別れる同僚のような、儀式的なキス。夫婦の深い愛情のキスではなかった。

俺はその細い肩越しに、彼女の悲しそうな横顔を見つめた。彼女の呼吸が少し震えているように見えた。泣いているのだろうか。でも、声を殺している。俺にはそれを確かめる勇気がなかった。確かめたら自分の罪悪感が増すだけだから。確かめたら美桜の悲しみを真正面から見なければならぬからだ。真正面から見て、それに応えることができなければ、俺は完全に夫としての資格を失う。

（ごめん、美桜。俺のせいで、お前まで……）

そう思いながら、翔太は眠りにつこうとした。しかし、眠れなかった。隣で美桜が眠る気配がいつまでも続く。彼女も眠れていないのだ。それは微かな身動きや、呼吸の乱れからわかる。もしかしたら美桜も、俺と同じように天井を見つめているのかもしれない。同じベッドの中で、同じ天井を、同じ絶望と共に見つめている二人。だが、その絶望は共有されているようで、実は別々のものだった。

二人で背中を合わせながら、それぞれに眠れない夜を過ごした。布団の中の空気が重くて、冷たくて、息苦しかった。

翔太のパジャマの下、萎えたモノが無力に横たわっている。まるで死骸のように。あるいは、まだ産まれていない何かの胎児のように。この肉塊が俺の男としての価値のすべてなのか。この肉塊が立たなければ、俺はもう男ではないのか。

翌朝、美桜はいつもより早く起きていた。キッチンでコーヒーを淹れる後ろ姿が、何だか小さく見えた。いつもの明るい朝の雰囲気とは違う。重い空気がリビングに満ちている。コーヒーの香りがいつもより苦く感じられた。ラジオが小さくかかっていたが、その音楽さえどこか歪んで聞こえた。

俺はリビングのドアの枠に手をかけて、彼女の後ろ姿を見つめた。白いブラウスに、紺色のスカート。いつものような服装なのに、なぜだか彼女が遠くに感じられた。同じ家にいるのに、二人の間に透明な壁があるような気がした。

「翔太、ちょっと相談いい？」

朝食の席で、美桜が切り出した。声は穏やかだったが、目は真剣だった。俺はパンを噛む手を止めた。口の中の食パンが急に乾いたように感じられた。唾を飲み込もうとしたが、喉が渇いていてうまく飲み込めなかった。何かを覚悟した目だった。妻が何か大きな決意をしたことを、俺は本能的に察した。

「うん、何？」

「私、翔太と同じ会社のみほちゃんに聞いたんだけど……黒川部長って、翔太の上司よね？」

翔太の手が止まる。全身の血が一瞬、逆流するような感覚があった。

黒川誠一郎部長。四十五歳。独身。

つづく